井沢正江

Izawa Masae

春陽堂

井沢正江　俳句文庫

平成五年四月二十五日　初刷発行

著作者――井沢正江

発行者――和田欣之介

発行所――株式会社　春陽堂書店

東京都中央区日本橋三―四―一六

〒一〇三　電話〇三(三二七一)〇〇五一

編集制作――株式会社桂樹社グループ

印刷・製本――長苗印刷株式会社

落丁・乱丁はおとりかえいたします。
定価はカバーに表示してあります。

井沢正江

自選三百句

春陽堂

目次

対談　わが俳句を語る　井沢正江／村上　護……5
第一期　一　身……33
火襷 35　一身 52
第二期　以　後……73
晩蟬 75　以後 96
第三期　湖の伝説……129
湖の伝説 131　湖の伝説 以後 169
わが師、わが結社……茂　恵一郎　180
句集・著作一覧……188
井沢正江略年譜……189
初句索引……192

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

装画—佐藤廣喜
装幀—相葉和子
口絵・対談写真—坂口綱男
本文写真—神吉　猛

対談

わが俳句を語る

井沢正江／村上　護

俳句との縁

村上　井沢先生は十代の頃からお茶を習ってこられたとか。戦前からですね。ずいぶん長くなさってるわけで、茶の湯の心もお伺いしたいのですが、最初はどういう関係でお茶に入られるようになったんですか。

井沢　私は、昭和十五年に台湾から引き揚げじゃないんですけれど、紀元二六〇〇年の祝典がございました時に、姉がこちらに嫁いで来ておりましたのでその家に遊びに来たんですね。そうしたら翌年に大東亜戦争が始まり、台湾に帰れなくなってしまいました。ちょうど台湾からこちらに移っていらした方が、お茶の先生をなさっていて、その方が品川にいらっしゃったんですよ。その時は、この方は教授の免許を持ってませんでしたから、京都の裏千家の今から三代前の円能斎（えんのうさい）の時代の業躰（ぎょうてい）をしていた鷲山先生という方にお習いしたんです。時々、京都からその品川のお宅まで来て下さいました。

村上　としますと、井沢先生は台湾台南市でお生まれになり、昭和十五年まではあ

ちらで成長なさったということですね。

井沢　そうです。女学校を出てこちらに来ました。ですからうっかりすると「日本語がお上手ですね」なんて言われるんです。父は早くに亡くなりましたが、母が兄達と台湾にいました。それが、私はこちらに遊びに来ておりましたので、母達も終戦になって引き揚げて参りました。

村上　そうですか。じゃあ、戦争中は家族と別れて日本に住んでいらしたわけで。

井沢　姉の家に居候しておりました。その姉というのは主人が大蔵官僚だったんですが、「主婦の友」に勤めておりました。だから、どこそこに原稿を取りに行ってくれなんて使いにやらされましたよ。

村上　よい経験をなさったわけですね。作家のところに原稿を取りに行くのも勉強になったでしょうが、お茶も始められたんですね。それが縁で俳句も始められたということですか。

井沢　お茶は私より後輩のお弟子さんだったんですが、当時大映映画の課長さんだった方が戦前の「山茶花（さざんか）」の爽雨門下だったんですよ。皆吉爽雨先生が「雪解（ゆきげ）」を

創刊されるというので古い弟子に呼びかけたんですね。それがきっかけで佐藤把雲という人ですが、把雲さんがみんなも俳句を作れといって、お茶の人達全員に俳句を作らせたんですね。だから、それこそ終いにはお茶の稽古に行ってるのか俳句の会に行ってるのか、さっぱりわからないくらいでした。

村上　品川の茶道の先生の家がたちまち句会の席になり、把雲さんが指導なさるわけですね。

井沢　把雲さんが当面の指導者で一年経ちまして、そろそろ爽雨先生を呼ぼうということになり、それで品川句会というのができました。当初はお茶の先生の家族が四人と、よそから私共のように参加している者が四名でしたね。女性が六人で、あとの二人は把雲さんとお茶の先生の御長男でした。でも、おもしろいもので、俳句界の結社の仕組みなんて知らない頃ですから、把雲さんが先生でその上にまた先生がいて……。お茶でも先生はいますが、お茶の場合は円能斎の業躰だった人とか、そういう一つの肩書きがございますね。

俳句の場合は虚子の弟子で関西では偉かったなんていっても、こっちではわから

ないんですよ。まして俳句の勉強なんかしてませんからね。実をいうと私は、文芸・文学のうちで一番俳句に縁がなかったんです。詩や短歌は若い時に好きで読んだりしました。だけど、俳句というのは芭蕉の句を一つか二つ知ってるくらいのものでした。

村上　きっかけは、意外なところにあるもんですね。としますと、むしろ詩集などはたくさん読んでおられたのですか。

井沢　詩集といいましても当時は昭和の初期で、新体詩が隆盛な時代ですから今の詩人の詩とはだいぶ違います。ですから外国の詩なんかでも、それこそワーズワースとか、そんな人達の詩ですからね。エリオットの詩なんて読んでびっくりしたくらいです。

村上　ひょんなことから俳句に入門されたわけですが、把雲さんは「茶の湯のわび・さびは俳句にもありますよ」と、こんな誘い文句で俳句を勧められたとか。

井沢　私はお茶が大好きでしてね、実はこの部屋もお茶室なんです。お茶は人を遠ざける芸だと思うんです。いや自分独りになるというか、自分をみつめるという所

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

ですね。お茶は大好きですが、お花は大嫌いでして、お花は自然のものをどうしてあんなにいじくりまわすのかと思いますね。ただ俳句のわび・さびなんてのは把雲さんのうたい文句でして、わび・さびで俳句がわかるはずございませんよね。（笑）

師爽雨のこと

村上　皆吉爽雨は大阪にあって早くから「ホトトギス」で活躍し、虚子のいう客観写生を貫いた俳人ですね。また大正七年創刊の「山茶花」により、後には田村木国、中村若沙、大橋櫻坡子と共に選者となり、戦前は関西ホトトギスの中心だった。ところが戦後上京されてから、爽雨先生はどちらに住んでいらしたんですか。

井沢　阿佐ヶ谷に住んでいらして、まだ住友電工に勤めていらっしゃいました。でも当時、「雪解」には女流はひとりもいなかったんです。品川句会から初めて女流が参加したんです。それで、爽雨先生は「お茶汲みができた」と言って喜んでね。その当時、昭和二十一年か二十二年にかけてずいぶん結社ができましたが、ほとんど男の方ばかりだったんですよ。

村上　それが一度に六人も女性が入って華やかになったわけですね。ほかの方は今どうされていますか。

井沢　六人のうち三人が非常に熱心だったんです。どの会にも出かけていくという具合にね。今は一人だけで、その方は秋川の養老院に入っていらっしゃるんですが、毎月投句なさっています。

村上　創刊当時の「雪解」には「山茶花」時代の爽雨直門も多くいらっしゃったのでしょうが、はじめの頃は不定期刊で、昭和二十三年から月刊になるのですか。

井沢　いや、昭和二十一年五月の創刊号から月刊だったんです。ところが、あの頃はまだ紙がない時代でした。爽雨先生の住友時代の部下に矢島さんという方がいらして、お家が書房で御自身も住友電工を退職して跡を継ぐということで「雪解」の発行を引き受けて下さったんです。だから、発行所は矢島書房なんです。そして毎月出そうとしたんですが、紙がないものですから合併号が多かったんですね。

村上　そうでしたか。どこかで十七号までは不定期に出ていた、と書いてあるものを読んで誤解しておりました。で、井沢先生は先ほどの話によりますと、「雪解」創

刊に合わせて、俳句を始められるわけですね。

井沢　そうです。そのころ創刊したということで、把雲さんが弟子を集めようと品川の連中を誘ったわけですね。ですから、「雪解」の創刊と同時くらいに俳句を作り始めているんです。

村上　一年間ぐらいは、一応予備軍ということで把雲さんが指導なさって。（笑）

井沢　非常に堅い人でしてね。今ですと始めた人はすぐ句会にも出なさい、投句もしなさい、と言うでしょう。だけど一年くらいは、どこにも出てはいけない、投句もしてはいけない、ということでね。

村上　一年くらいかけて「雪解」俳句の理念や作り方などを教わったのですか。

井沢　いや、全然。私は俳句に季語があって、それが約束事としてそれを入れなければいけないということはまず教わりましたけれど、詩の一行くらいに思ってましたね。ですから爽雨先生のいう写生俳句なんていうのとは一番遠い弟子でしたよ。一番覚えが悪くて……。こういうことっていうのは抒情ですね。

村上　爽雨先生という方は、錚々たるお弟子さんをたくさん世に出されたわけです

が、指導方法にはどんな特色があったのでしょうか。

井沢　爽雨先生の一番の特色は常にご自身の実作で弟子に示すということでして、ですからどんな句会でも、どんな初心者の句会でも投句なさったんです。選者だからといって、隣の部屋にいて皆に句を作らせるということは一度もなかったですね。ですから、初心者の私共も作って互選で取りますね。初心者でもいいものはわかるんですよ。「これが先生のだ。きょうは先生の句を何句取れた」なんて言って喜んで、それが勉強でした。理論的に俳句を説くなんていうのではなく、常に実践型の人でしたね。

村上　爽雨先生は客観写生の道で、当時追随を許さない第一人者ですね。そんな先生が一緒に俳句を作り、実践で手本を示されるわけですね。

井沢　実践の示し方というのを具体的に言いますと、写生という言葉がわからない頃は形容詞を使いたがるんですよ。山が美しいとか、そのくらいの形容になっちゃうんです。それを先生は、どういう姿をしているから美しいのだという……。絵でいいますと、まずデッサンができないといけないということですね。ともかく美辞

麗句は使わない。しっかりと物の形を明らかにするということですね。

村上　「雪解」俳句の理念には客観写生ということが一本中心にありますね。それと同時に客観写生の真髄は、やはり主観との表裏一体という考えもありますね。客観と主観というのは反対概念ですけれど、爽雨先生の頃からそれを包括する考え方もあったんでしょうか。

井沢　結局、客観というものはその裏に作者の主観というものがあって描けるもので、客観化したものに自ずから主観が添うわけですね。私なんか最近、爽雨先生は「客観、客観」とあれほどおっしゃって、そしてどの先生も別の美学の言葉で何か言ってらっしゃるけれど、みんなやってることは同じだなあと思うんですよ。ほとん

ど客観も主観も行き着くところはキザな言葉でいいますと、やっぱり哲学がなくちゃいけないということなんでしょうね。

村上　爽雨先生の日常の言動や生活のなかで哲学的というか、奥深さというものを感じられましたか。

井沢　皆吉爽雨という方には、戦前から弟子がたいへん多かった。「山茶花」には四選者いたんですが、爽雨先生についた弟子が多かったんですよ。そういう人達がひとりも離れず、戦後「雪解」を創刊したとき全部集まっているんです。爽雨先生は俳句の魅力だけじゃなく、人格的にもなんとも優しかったですね。優しくて恐かった。小言をぐだぐだ言う方ではなかったけれども、俳句の上では厳しかった。それ以外のことはどうでもいい人でした。

村上　関西での「山茶花」時代からの俳人が多いから、「雪解」は今も関西で根強いものがございますね。僚誌も「うまや」「懸巣」「いてふ」などがあって。

井沢　関西には六百人を越える弟子がいるんですよ。ですから支部的にあつかっていますけれど、そういう人達がともかく爽雨先生に習ったということを、そして今

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong